
キャラメルコーヒーを君と

陸たまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャラメルコーヒーを君と

【Nコード】

N4973I

【作者名】

陸たまき

【あらすじ】

酒場の女主人の独り言。若い男女を見ながら思い出すのは。

あと3分。

時計にちらりと目をやって、ヨミは店内を見回した。

彼女はこの食堂の女主人だ。

外では日が傾き始めている。客足が増えるにはまだ時間がかかるだろう。

それでもテーブルには何人かの客がいて、早くも酒を酌み交わしていた。これくらいならば働き手が1人休んでいても支障はないだろう。

そんなことを考えながら片づけをしていると、店の扉が勢いよく開けられた。

いつも通りに現れた彼を見て、ヨミは苦笑する。

若い男だった。

夕日に照らされて、金色に髪が輝いている。

彼はここ1年ほどだろうか、毎日この時間にこの店にやってくる。

真っ黒ではない深い青色の瞳の、なかなかの好青年だ。

エージという名前しか知らなかったが、彼の振る舞いの端々から、それなりの礼儀作法を身につけた上流階級の人間だと気づいていた。

その彼が、身分を隠し労働者の服を着て、毎日のようにやってくる。理由は誰の目にも明らかだった。

彼は、ここで働くりディアという娘に恋をしているのだ。

エージは走ってきたらしく、肩で息をしている。けれども頬が赤いのは、決してそのせいだけではないだろう。

死んだ夫と彼の姿が重なって、ヨミは目を細めた。もっとも、夫は本当に労働者だったのだけれど…。

はたと現実に戻り、ヨミは当のリディアを見てため息をついた。

彼女は茶色の髪を邪魔にならないようにひとつにまとめ、大量の皿をいかに効率良く洗うか考え込んでいる。

真っ黒の瞳には、皿しか映っていない。

まったく…。ヨミはため息をつく。

知り合って一年にもなるのに、お互いに好意を抱いているはずなのに、この2人はいつもこんな感じだ。

けれども、その姿がまた自分たちに重なってしまっただけで、ヨミはため息をついた。

夫も毎日のようにここに来ていた。

けれどもお互いになかなか話しかけられなくて、夫はちびちびと1番安いキャラメルコーヒを飲んでいた。

告白されたのは、珍しくビールを頼んだ日だった。

死んだのも、慣れない酒のせいだった……。

ヨミは首を振り、気を取り直してリディアの手からスポンジを取り上げる。

「ここはあたしがやるから。あんたはエージの相手でもしてあげなさい」

「え、でも…」

ちらりと店の中に目をやって、リディアはうつむいた。

「今日は客も少ないから平気さ。忙しくなったら呼ぶから、それまで休んでなさい」

それから、声を落としてささやく。

「毎日来てくれる常連さんなんだ。しっかり捕まえておきな」

ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべると、リディアもつられて笑った。

リディアを見送ってから、ヨミはぽつりと呟く。

「もっとも、いつも1番安いキャラメルコーヒーしか頼まない人を、大切な客と言うならだけど」
ふっと笑いがこぼれる。

そして大量の皿と向き合う。

ああ、やっぱり恋は素晴らしいわなんて思いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4973i/>

キャラメルコーヒーを君と

2011年1月28日13時31分発行